

相模原市立博物館「民俗調査会」と横浜市歴史博物館 「民俗に親しむ会」の交流会記録①

加藤 隆志・刈田 均*・羽毛田 智幸*
相模原市立博物館民俗調査会 A 横浜市歴史博物館民俗に親しむ会

* 横浜市歴史博物館

はじめに

相模原市立博物館（以下、「本館」と記す）では、各分野において市民とともにさまざまな活動を展開しているが、筆者の担当する民俗分野でもいくつかの市民の会が結成され、活動を行っている（注1）。本稿で取り上げるのは、そのうちの民俗調査会 A で行っている横浜市歴史博物館（以下、「横浜市博」と略記）の「民俗に親しむ会」との交流会の状況である。

民俗調査会 A は、平成 18 年(2006)7 月から 21 年(2009)6 月までの間に本館で開催していた民俗講座「民俗に親しむ会」の参加者に呼びかけて結成された二つの会（注2）のうちの一つ（もう一つが「民俗調査会 B」である）である。最初の活動は平成 20 年度秋に実施した秋季特別展「みてみて津久井ただいま調査中! 第2期～津久井の歴史と文化～」(会期: 10 月 4 日～11 月 30 日)において「甲州道中を歩く」を担当し、会として実際に市域の甲州道中四か宿（関野・吉野・与瀬・小原）を中心に、山梨県の上野原駅から東京都八王子市の小仏峠を経て高尾駅までの間を歩いてその間の社寺や石仏などについてデータをまとめ、地図や航空写真などを交えて甲州道中の旧道を展示した。さらに関連事業として、自分たちの実際に歩いた成果を活用して一般の市民を広報紙で募り、相模湖駅から藤野駅までの現地を歩く機会も設定した。この展示会が終了後にも活動を継続し、市内から相州大山まで至る大山道や、合併して新たに市域となった津久井地域及び、旧市域の近世期に集落があった地区などのフィールドワークを行いつつ、昨年度からは新たに「民俗探訪会」として広報紙等で別の市民を募って調査会の会員が地域を案内する試みも開始している（注3）。これに対し、横浜市博の「民俗に親しむ会」は、平成 20 年年度に同館で開催された民俗講座「民俗の見方、調べ方」を母体として結成された会で、21 年 6 月から鶴見川流域のフィールドワークを始めて源流部から河口までを踏破し、現在まとめの作業に取り掛かっている（注4）。

本稿では今年度から開始した両館の交流会のうち、第一回目（5 月 27 日・日）の相模原市中央区田名地区を

取り上げる。第二目（10 月 13 日・土）に行われた横浜市鶴見区でのフィールドワークの内容及び、参加した民俗調査会 A の会員の感想文については横浜市博側の調査研究報告に掲載の予定であり、詳細は同書に譲ることにする（注5）。

本館と横浜市博の交流会開催の経緯

両館が市民の会同士の交流を始めるきっかけは、加藤が横浜市博の刈田学芸員に交流会の実施を提案したことにある。実は加藤は横浜市博の民俗講座「民俗の見方、調べ方」の講師を依頼され、第一回目の「地域を歩いて見えることⅠ—民俗とフィールドワーク—」と第四回目の「地域を歩いて見えることⅡ—実際に地域を歩いてみよう—」を担当した。そのため、「民俗に親しむ会」での鶴見川流域のフィールドワークの状況など、折りに触れて刈田氏からお話を伺っていた。そして、刈田氏から足掛け三年に及ぶフィールドワークがようやくゴールに至ったことを聞いて、両館の市民グループ相互の交流会を申し入れたのであった。現在、各地の博物館では市民参加による多様な活動が展開され、それぞれの館で多くの成果が挙げられているのは周知の通りである。しかし、実際の盛んな活動の様相に比して、世間的には今一つこうした活動が認知されているとはいえない現状にある。もちろんこれは博物館側の PR 不足といった面が多分にあるのだが、せっかくの博物館での活動がよく伝えられていないとしたら大げさに言うなら社会的にも損失であり、博物館の活動を通じて、「地域力」や「市民力」を高めることに貢献できるのを社会的にアピールすることが重要であろう。今回の交流会も、こうした取り組みを通じて両館の市民の会による活動がお互いに刺激を受けて一層活性化することはもとより、ささやかな取り組みではあるが博物館での市民の活動の展開について館の内外にアピールしたいとの狙いからの提案であった。

また、両館の交流会に先立ち、23 年（2011）11 月 20 日に実施した本館での「学びの収穫祭」では、本館の民俗調査会の会員と横浜市博「民俗に親しむ会」、平塚市博物館「民俗探訪会」、東京都多摩市のパルテノン多摩「多

摩くらしの調査団」の四館の市民の会が集まり、本館のいろいろな分野の市民の会による調査・研究発表を聴講するとともに、全体の発表会の終了後には四会が集まり、それぞれの会の活動の状況や特徴、課題などについて相互に報告し意見交換する機会も設定した。「学びの収穫祭」は、本館の開館記念日である11月20日前後の土・日曜日に行い、市民の会や中・高等学校の文化系サークル等が口頭発表やポスター発表、ワークショップなどで日頃の活動や成果を示しながら本館の市民の会相互の情報交換をすることを主な目的としている。その場に他館で活動する市民の会のメンバーが参加することで、改めてこのような活動が広がりを持って行われていることをそれぞれの立場を越えて認識することを意図したものであった（注6）。このようないくつかの機会を設定する中で、さらに深く、かつ継続的な交流をすることを目指して開始したのが横浜市博「民俗に親しむ会」との交流会である。

相模原市中央区田名地区の第一回交流会について

以下、第一回目の交流会の概要について報告する。

日 時：平成24年5月27日（日）

午 前 9 時 45 分～午後 4 時

場 所：相模原市中央区田名

（四ツ谷～半在家～堀の内～久所～滝集落）

参加者：本館民俗調査会 A 会員 15 名（別に学芸員 1 名）、横浜市博 8 名（別に学芸員 2 名）

コース：JR 淵野辺駅午前 9 時 45 分発「水郷田名」行バス乗車→「四ツ谷」バス停集合→石神社（四ツ谷）→横浜水道道→山王神社（半在家）→蚕影社・道祖神（堀の内）→田名民家資料館→烏山藩制札場跡→旧大山道→相模川ふれあい科学館（昼食）→田名八幡宮（滝・久所）→宝永寺跡→山王坂→宗祐寺→新堀用水取入口→白子園稲荷・大鷲神社→久兵衛土手→火の坂（狸菩薩）→高田橋→「高田橋入口」バス停乗車・解散

今回のコースは、これまで本館が行ってきた民俗講座等で何回か歩いた経験があり、変化に富む上に相模原の旧市域の特徴がよく分かるものであり、横浜からの参加者を迎えるには適したコースであることから民俗調査会の会員とも相談して今回のフィールドワークを計画した。

①石神社にはさまざまな種類の市域に多く見られる石仏がまとまってあり、さらに山王社の陰陽石、蚕影社の大きな陽石など、特徴的な石仏が多く見られる。

②蚕神である「金色姫」を祀る蚕影社や、かつて盛んだっ

た養蚕の道具を多数展示する田名民家資料館など、地域の養蚕文化を知るための重要な施設がある。

③昔の古道の様子が今も比較的残されている旧大山道とともに、久所（水郷田名）集落の白子園稲荷・大鷲神社、高田橋（「久所の渡し場」のあった所）など、この地がかつて大山詣での人々が多く通行した地であることを示すものが点在する。

④正月に行われる的祭り及び9月の三匹獅子舞で有名な田名八幡宮や、相模川を流れてきた薬師如来を祀るとともに水田開発に尽力した江成久兵衛の墓がある宗祐寺といった地域の中で重要な寺社とは別に、烏山藩制札場跡や廃寺となった宝永寺跡、山王坂の徳本上人六字名号塔など、普段は何気なく見過ごしてしまい勝ちであるが、歩くからこそ見つけられるようなフィールドワークの楽しみを実感できる地点も多数含まれている。

⑤旧大山道の降り口や宝永寺跡の脇・高田橋など、相模野台地と沖積低地の高低差や対岸の愛川町側との地形の違いがわかるとともに、雄大な相模川の流れがパノラマのように眼前に広がる風景が味わえる。

⑥そして、道志川から取水して現在も横浜まで通水する「横浜水道」の水道道は、その取水口である青山水源池が合併して新に相模原市に含まれることとなった点も含めて、特に横浜からの方々には是非、お話ししなければならないものであろう。

以上のような、コース全体の見所や留意点を踏まえつつ、実際のフィールドワークの進行に当たっては加藤とともに民俗調査会の会員が適宜説明していったが、会員は説明だけではなく途中の交通安全に対する配慮はもちろん、お互いに初めて顔を合わせる相模原と横浜の市民同士が極度に緊張することなく、楽しく実施できるように声掛けなどをすることを念頭に実施したのであった。

以下、当日参加された横浜市博の「民俗に親しむ会」の方々から寄せられたレポートを紹介していく。なお、掲載については五十音順で敬称は略させていただき、基本的にはレポートを取りまとめた横浜市博から送信された文章をそのまま掲載した。

相模原交流会に参加した感想 宇都宮 博

田名では以前子供の小さい頃に水郷田名、淡水魚のふれあい科学館に行っただけ、高田橋ではこいのぼりしか知らずに参加の私でした。

今回の交流会で1日案内していただき、新しい驚きの連続でした。特に蚕影神社、田名民家資料館の養蚕関係には一番興味がありました。田名八幡宮の的祭り他の地域行事や陽陰石、徳本念仏塔、亀の甲石他の石造物、石

神社、更に田名の人達の入会地などの資産運用や有効な使い方と先述の民家資料館も民間で設立運営が行われていることや、江成久兵衛は横浜、川崎の埋め立て他の浅野惣一郎と違ったローカル色に富んだ偉大な人物であること、また景観などでは河岸段丘の上下はそれらを登り降りした経験を含め忘れられないものとなりました。これら以外にも印象に残ったのは多数で有意義に過ごせた交流会でした。

コースなども散策場所が比較的固まっていたのが、案内される方にとってもよかったのではないかと、また歩いた距離が12000歩位でしたが、あのように大勢の時はこの位がいいかとも思いました。

昼食では本当は相模原の人達と話しながらゆっくりと食べれたら、更によかったかなと思いましたが、その間に横浜のグループはふれあい科学館を見せていただいたので、その時間を有効に過ごせましたので、やむをえなかったかと思います。

加藤先生が直接ご案内、説明していただき、必要に応じ詳しい方が補充していただき非常に分かり易かった交流会となりました。ご準備、ご案内いただいた相模原の方々に深く感謝しています。わざわざ手に入れていただいた鮎のお菓子や手作りのゆず菓子などに対して、私達は何を用意すればいいのかなあと思いました。

私達の横浜側がお迎えする交流会の準備にとっても、非常にいいご示唆をいただいたのではないかとわれ、その際には相模原の方々に喜んでいただけるものにしたものです。

相模原交流フィールドワーク 長田 文美

感想 楽しみにしていた通りのすばらしいフィールドワークだった。田名地区という狭い範囲を歩いた一日だったが、たくさん見所があって楽しむことが出来た。

相模原の地形や雰囲気は横浜や鶴見川沿いの景観とはまったく違って思うように思えた。一番印象的だったことは、河岸段丘を目の当たりに見てその段差の大きさに驚きを感じた。相模川は鶴見川よりもゆったりと流れているような感じを受けた。大山道が通り、旅人や地元の人々が渡しを利用して、今も河川敷で釣りや川遊びを楽しんでいる様子が、さすが、鮎漁や鵜飼いが盛んだった川だと感じた。

相模原市立博物館のグループの皆さんの説明は詳しくて丁寧で感謝の気持ちでいっぱい。「何も無いところですが」と言いながら、郷土の祭りや行事を誇らしく話され、とくに田名民家資料館の出来たいきさつと、そのすばらしい展示には私達も感動した。また、鮎の形をし

たお菓子は中に「ぎゅうひ」と鮎が入っていてとてもおいしかった。これにつりあうようなおいしい銘菓が横浜、鶴見にあるかな？としばらく考えてしまった。

フィールドワークのまとめ

10:15 ①石神社 田名村四谷と言う集落、側の道路と平行して大山道が通っている。

・石塔が集められている。六字名号塔（時宗、遊行寺、當麻無量光寺、相模原から津久井にかけて多い。）大山道道標、庚申塔、石橋供養塔（石橋等を造ることが供養になる。）



①石神社六字名号塔

10:35 ②横浜水道道

・横浜開港後、より上質の水を求めるため、相模川から水を引くことになり、明治20年、完成。野毛山浄水場から横浜市域に配水された。現在でも横浜の10%相模川の水でまかなっている。横浜市の管理、管轄。エアバルブのふたにY.W.W.の刻印。



②横浜水道道エアバルブのふた

10:50 ③半在家山王神社

・陰陽石の道祖神
・「在家」とは中世、荘園などで公事を負担する農民のことをいう。「半」とは公事の半分か在家の半数か？



③半在家山王神社陰陽石

・この周辺の石仏が集められている。馬頭観音が多いのは、馬を大切にしたことを示す。近くを大山道が通るからか。

11:10 ④蚕影山神社（堀の内集落の中心地）

・「相模の三マラ」として有名な男根石、別の場所から移されたもの。
・金色姫の木像、養蚕が最も盛んな地域、昭和50年頃まで農家あり。

⑤田名民家資料館 前に弁天池、水が湧き出ている、八瀬川の水源

・田名地区で運営している珍しい資料館。養蚕農家を移築したもので、当時の養蚕の道具や生活の道具がおかれている。天井の梁や大黒柱は大きな一木材、天井には蚕



⑤弁天池 八瀬川の源流

の蔭がくっついている。

・毎年3月3日まで、ひな祭りの雛人形が千数百体も飾られる（写真が飾ってある）。

11:40 ⑥烏山藩制札場跡碑

・田名村は享保13年より、烏山藩大久保氏の領地。制札は高札ともいう。

⑦大山道、河岸段丘の急坂を下る、広い平地は以前は水田、大山が見え眺め良好

・「水郷田名」の由来:昭和40年くらいから。もともと田名久所（ぐぞ）集落は大山参りの人々が相模川をわたる際の渡船場であった。いかだの組み換えが行われ、船頭さんたちの休みどころがありにぎわった。相模川の鮎は美味と評判で、鵜飼いも行われていた。「鮎の水郷田名」と呼ばれるようになった。

12:03 ⑧ふれあい科学館 昼食（銘菓鮎のお菓子をご



⑦相模川の河岸段丘 段差がよくわかる

ちそうになる）科学館見学

13:03 ⑨田名八幡宮 田名地区全体の神社 久所（ぐぞ）地区の町中にある。大祭と小祭

・「的祭（まとまち）」で男児が大きな的に矢を射る行事

・三栗（みつくり）山造林記念碑 田名町の資金として
・じんじい石、ばんばあ石、代理石（めかけ石）

13:20 烏山用水 烏山藩江成久兵衛が灌漑用水として造る。



⑨田名八幡宮の裏手じんじい石、ばんばあ石、めかけ石



烏山用水 烏山藩・江成久兵衛によって造られた灌漑用水

13:30 相模川沿いを歩く

13:45 ⑩宝永寺跡 滝集落（滝地区） 地藏堂 亀の甲石

13:45 桑室（くわむろ）半地下の部屋で桑の葉を保存した（蚕のえさの桑の葉は水滴がついているままではよくないため、桑室で前もって保存した）
滝の渡し 集落の人びとが使った渡し場、針金

渡しは昭和 40 年代まであった。

山王坂

13:50 徳本念仏塔 徳本は紀州の人、独特の書体



滝の渡し 集落の人々が使った。
針金の渡しが昭和 40 年代まであった。



徳本念仏塔(山王坂) 独特の書体

14:05 ①宗佑寺 鎌倉時代、相模川から薬師如来像をひきあげ、薬師堂に祀ったという伝え。網上げ薬師ともいう。10月12日に開帳
裏手の墓地には、江成久兵衛の墓
滝坂 急にまがる昔の坂道

14:30 水路に沿って歩く 石積みが名主の屋敷内にある
江成銀蔵の墓 中世からの小領主、後北条家臣
大山道を中心地 料亭

14:50 ②大鷲(おおとり)神社 石塔「鮎の水郷田名」

15:05 久兵衛土手

15:15 ③火の坂、狸菩薩

火の坂はヘアピンカーブのような急な坂道、その下のがけの洞窟に「狸菩薩」がある。

15:25 高田橋 相模川 向こうに昭和橋

5月にはたくさんのこいのぼりが泳ぐそう。



ヘアピンカーブのような「火の坂」
段丘のがけの下に「狸菩薩」の洞窟



相模川にかかる高田橋 5月ゴールデンウィークにはこいのぼりが泳ぐ

相模原市立博物館との交流フィールドワーク感想文

勝田 富夫

5月27日に第一回の交流会に参加して、相模原市の水郷田名地区を訪問した感想をまとめました。あらためて資料を読みなしたり、写真やメモを見て、振り返って見た。

まず、第一の感想は、さすがは10年以上の活動経験があり、皆さんの意識の高さを感じました。それぞれの方がテーマを持たれて継続的に活動されているのではと思いました。

今回訪問した場所について、特に、興味を持ったことなどの感想を次にまとめました。

1) 石神社

現在は交通流の多い道路脇にあったが、昔、四ツ谷の鎮守として桑畑の中にあったことを、想像することは難しい。明治の神社合祀の歴史が大変興味深い。また、石橋供養塔の解説では、「供養」の意味について、現在と異なるものだということを改めて理解できた。

2) 旧横浜水道みち

20数年間、横浜に住んでいながら、はじめて知った事柄である。施設経営が神奈川県から横浜市に条例によ

り引き継がれていることを含め、多くが知らないことであった。

3) 田名民家資料館

もとは養蚕農家であったものを移築して、現在の資料館となったと説明があったが、なかなか内容も充実したものであり、関心を持ちました。田名地区の自主運営であることが、この地域の豊かさを示しているとのことであるが、行政に頼らず継承していく意識の高さに対して敬意を表します。今後も頑張ってくださいと思います。雛人形祭りの頃に再訪したい。

4) 大山道と水郷田名

あの有名な大山参りの大山道の要所として、水郷田名の久所集落は、渡しの場所として、宿屋が出来て、鮎、料亭、歓楽街等が有名となって、昭和10年に久所は「水郷田名」と呼ばれることとなったと説明がありましたが、交通の要所であったことが良く判りました。それにしても、旧大山道の跡の急坂（現在は藪）などところを往来していたと思うと、当時の信仰心の深さを思い知る。

5) 山王坂

山王坂近辺には、徳本念仏塔、江成家墓、田名八幡宮、烏山用水など興味深いものが多く残されていて、高台からの素晴らしい風景もあって、相模川を中心としたものを多く見られた。

見どころが多く、大変良く地域を知ることが出来た。その他、多くの神社やお寺も見ごたえあるもので、今回の企画をして頂いた相模原市立博物館の関係者の方々に、感謝を申し上げます。ありがとうございました。

相模原との交流会の感想 加藤 節男

1、コースについて

コンパクトな地域内で主として（田名八幡宮を除いて）、江戸後期（大行者徳本さん、新堀用水など）から近代（横浜への水道みち、養蚕で潤った料亭、狸菩薩など）まで田名地域のさまざまな顔を見られたことは良かった。

それにしても狭い地域によくあれだけいろいろなものが残り、見るべき場所が数多くあったのには驚いた。

また、ある特定のひとと地域の繋がりや強さを感じさせる場所も所所にあり感心した。

設定してくださった加藤先生とメンバーの皆様に感謝。

2、相模原のメンバーについて

歴史学とは何かと民俗学とは何かなどと中途半端な学者まがいにならず、我が住む郷土を中心に自分の興味を持った対象を中心に熱心に探求する人たちが、いい意味

でのアマチュア、活動はかなり長期にわたりながら、初心を忘れない人たちが多くいるように思われ、好感が持てた。それだから、その分、説明も説得力があった。

3、歩いたマチについての雑感を以下順不同で。

・地域に存在する大百姓のこじん個人が支える村だったとの印象が強く、共同体としての村の印象が薄かった。三栗山財産管理委員会？も、村民全員の入会地管理というより特定の大百姓の共有財産の管理のための組織に見えたが見間違えか？

大地主とも庄屋とも違う大百姓が田名で果たした役割とは？絹の時代になってどう変わったのか資本家や経営者になれたのか？同じ絹で栄えた秩父や多摩と同じように自由民権運動は？など「田名の大地主」は興味がわく存在であった。

・60年代以降の急速な住宅地化で地域の石仏などもキレイにまとめられ、鶴見川流域以上に、それぞれが存在していたあるいは存在すべき土地から切り離されているのではないかと。これも、急激かつ大幅な住民の交代があったとしても、共同体としてのまとまりの弱さの反映と考えるが間違いか？

・合祀された神さまを取り戻した話に興味を持ったが、主として、昭和に入って出征兵士のためだったとは意外。しかしこれも神国日本の近代史・近代思想史の一コマと見ると象徴的な出来事と思え、また、日本の軍隊を農民が支えていた事と彼らを支えた強さが判るような気がした。

鶴見川流域を歩いた時、墓地で見た二等兵や軍曹のお墓の大きさに驚いた経験に重なる。

・養蚕で築いた富が、田名の明治以前の生活をすっかり街中から消し去ったように思える。だからではないが、明治から昭和10年代までの養蚕の遺産をもっと大事にしてほしい。

水路の整備だけでなく桑の並木道でも作ったらどうだろうか？（並木にしづらいことは重々承知で）

・川底から見た台地・ハケの景観を大事にしてほしい。狸菩薩の上の長い坂道も帰宅して地図で確認すると思いがけない長さ、余計な樹木などを伐採してその全体を低地から眺められたら、さぞ壮観と感じた。

また、川底からだいぶ高いところにあった玉石を多く含んだ泥流の跡。その昔、台地？を流れていた暴れ川の痕跡としてもっと関心をもたれて良いのではないかと。

民俗に親しむ会 5/27 相模原交流会の感想 小松崎 勇

《1》多面的把握の必要 昨年度「さいかちの会」のバスツアーで、相模原の勝坂遺跡などを見学し、相模原市に

対して、戦前の「軍都相模原」のイメージに加え、縄文遺跡の宝庫という印象を強く持っていましたが、それは市南部のことで、今回の田名地区の踏査で、相模川を擁する都市及び戦前の養蚕都市のイメージを強くしました。今後とも、北の多摩川及び南の相模川の歴史と文化を貪欲に吸収しながら、わが鶴見川流域巡りを続けたいと思います。

《2》相模川について 高田橋上流から見た相模川及びその少し上流の絶壁から俯瞰した相模川の眺望は満々と水を湛え大河の風格十分で、相模原の地理も歴史もこの川抜きにしては語れないと思いました。聞けば源流は山中湖の由、それ以外にも丹沢山塊の南北に大きな支流を擁しています。流域面積は鶴見川の比ではありません。展開された流域住民の生活～例えば相模川の中流・下流の舟運など興味をそそられるテーマです。

《3》旧横浜水道について 稲作民族にとって、また近代都市にとって、水はライフラインの根幹である。相模原グループが野外活動のテーマとして、「旧横浜水道」を取り上げ、津久井から横浜まで踏破され、過日、その記録を博物館で展覧されたが、見学して大いに刺激を受けました。お雇い外人パーマーにより、相模の台地を南北に貫いた壮大な事業は、あたかも「橋樹の台地貫くニヶ領用水」の江戸初期の大工事を想起させます。

交流会に参加して 下村 信子

加藤先生と相模原の皆さんにご案内頂いた水郷田名地区はフィールドワークの色々な要素（石造物、資料館、寺社、歴史ある町など）を持ち合わせているばかりでなく、地形のおもしろさ（河岸段丘）や景色の美しさ（相模川）を兼ね備えていて歩いていても飽きることがありませんでした。季節やお天気にも恵まれて、私の好奇心を存分に満ちし、印象深い一日を過ごすことが出来ました。心を尽くして私達を迎えて下さった加藤先生はじめ相模原市立博物館の民俗調査会A班の皆様のおかげと感謝しています。

私の反省点としては、せっかくの機会にもっと相模原の皆さんとお話をして交流すればよかったということです。例えば、皆さんはさらに分かれて交互にフィールドワークの準備（ルート決定、下見、資料作成など）をして、毎月のフィールドワークを続けていращやるとのこと。経験豊富な相模原の皆さんに教えて頂くことが沢山あるのではと、改めて思いました。

以下にフィールドワーク中の雑感を記します。

1 バスの車窓から バス通りに交差する大小の道が碁盤の目の様であった。（淵野辺～四ッ谷） それらの道が

ずっとまっすぐに伸びる様子に「相模原」の広がりを感じると共に、街の成り立ちに興味をもった。「軍都相模原」いう言葉を知り、明治から戦後までの市街化の歴史、特に陸軍や米軍の利用の歴史を知りたいと思った。

2 石造物 半在家の山王神社の馬頭観音が心に残っている。観音のお顔が砕かれていて哀れであったにもかかわらず何故か素朴な温かさを感じた。今後の鶴見川フィールドワークで馬頭観音に注目して歩きたいと思った。

3 横浜水道道 これが開港後に造られた水道かと感動した。今でも現役であるのも驚きだった。開港後の横浜と「相模原」が「絹の道」だけでなく「水の道」でも繋がっていたのだと思った。

4 田名民家資料館 民間で設立、運営していることに驚いた。設立までの経緯が興味深かった。田名の人々の「遺す」ことへの高い意識を感じた。

5 河岸段丘 こんなに立派な河岸段丘が神奈川県に存在するとは！しろ坂上で突然視界が開け水郷田名と相模川を見下ろした瞬間は最高だった。河岸段丘の段差を体感できるのも珍しく、楽しかった。

6 水郷田名 烏山用水が整備され遺されているのが素晴らしい。しかし用水や一軒残った料亭を見ても、渡しのかかりとしての昔の賑わいは想像できない。現在の久所地区には穏やかな時間が流れていた。

田名八幡宮には田名地区の昔をしのぶ大切な行事の「的祭」や「神代神楽」が継承されているという。これも、「遺す」ことに意識が高い田名の方々の努力の賜物だろう。

また田名の女性たちが信仰してお参りしたという陽石道祖神や狸菩薩。しばし当時の女性たちに思いをはせた。現代からは想像しがたい苦労もあったろうが、おおらかで生命力あふれた時代だったのではないだろうか。

最後に初めての方々と歩くことに最初は緊張しましたが楽しい一日でした。これからもこのような交流会に参加していきたいと思います。

相模原交流会・感想 林 浩一

相模原交流会に参加させていただいて、一番の印象は私の住んでいるところにはない地形の違いでした。突然、眼下に広がった広大な風景に驚かされ、この下り坂（しろ坂）を降るのかと（降るということは必ず登ること）恐ろしくなりました。そして相模川が長い年月をかけて作りあげたこの河岸段丘は、ここに住んできた人々にとってどのような影響を与えているのだろうか興味を持ちました。昔の人は歩いて移動するのが当たり前。

山一つ越えたりして、隣村などに行ったりするのが普通だから、この崖はなんのことはないのでしょうか？現在の車社会に生きている私は車があるから上に登ったり下に降りたり、わけなく出来るでしょうが、歩きでは気楽には行けない気がしました。

もう一つは相模田名民家資料館です。村の入会地であった三栗山をゴルフ場に貸し、その収益で運営されていると聞き、村の土地を村の土地として残してあったこと、村の歴史を残す資料館をつくったこと、素晴らしい事だと思いました。

バスを降りて、いきなりの石神社・石造物の数の多さ、横浜水道みちに横浜とのつながりを感じ、半在家山王神社の陽石・陰石・蚕影山の道祖神に圧倒され、田名八幡宮のじんじ石・ばんば石・代理石の物語の面白さ、烏山用水の豊かな水、堰によりあちこちに引き入れられている水路、山王坂の徳本念仏塔、宗祐寺の江成久兵衛のお墓で江成一族を思い、横浜貿易新報が神奈川名勝史蹟45佳選で選んだ「鮎の水郷田名」の碑が水郷田名の由来と教わり、久兵衛土手のはっきりしない感じや、「火の坂」の狛菩薩からの長い坂道（やっぱり登るの？と一瞬思いました）なども、興味深く印象に残りました。

そして相模原の方々がこの日のために、解禁前なのにわざわざご用意くださった「若鮎」のおもてなしに暖かい心配りを感じ、とても嬉しく思いました。と同時に横浜にお迎えした時、これに匹敵するおもてなしは？？と心配になりました。

楽しい交流会をどうもありがとうございました。

交流会に参加して 松本 昇

相模川の作った見事な河岸段丘を見ることが出来て満足しました。見るだけでなく歩いたことがさらに満足感を増してくれました。特に「しろさか歩道橋」から見た景色は、河岸段丘の有様が良く分かり横浜の「台地」から見る景色との違いを体感することが出来ました。さらに「旧大山街道」を下ったことで「段丘」の急峻な様子を体感することができました。

また、印象に残ったのは二つの「陰陽石の道祖神」でした。

山王神社（半在家集落）の対になって並べてあるようですが、なんともほほえましく感じました。そして加藤先生の話された「陰石」にまつわるエピソードが、このような「もの」にこだわる人々がどこにでもいるものだと分かり面白かったです。また「蚕影神社」（堀の内集落）の「男根石」の見事さにはびっくりしました。「金精様」とも言われたりしている道祖神を見たことがあります

が、これほど見事なものは初めてです。（案内に「相模の三マラ」として有名な男根石あり）というのも納得でした。案内の中にこれを入れたのも宣なるかなと思いました。そして久しぶりに「マラ」という言葉に出会いました。在所で子どものころ密かに話題になっていたことを思い出しました。隠語というか俗称というか人前で出す言葉ではないということで忘れていましたが……。改めて調べてみて仏教語であり僧の隠語であることを知りました。人前であからさまに言うこと（このように考えるようになったのはいつからなのか？）でないことをこのような形で表わしたことに昔の人々は明るくおおらかに「子孫繁栄」を祈ったのでしょう。また「解説」の中にあるように花街の芸妓たちの信仰の対象であり（客が多くなることを祈った！）子宝に恵まれない女性が妊娠を祈願して祈ったとありますが、この土地の人々の生活の有り様が分かる貴重な物だと思いました。

そして「田名八幡宮」の「じいじい石」と「ばんばあ石」と「めかけ石」の解説文の伏字というか訂正文の有り様にこの土地にも時代の変わりようが見られたなど興味がわきました。

加藤先生はじめ相模原の皆様には貴重な体験と学習の機会を御提供いただき感謝申し上げます。ありがとうございました。

上記のレポートを見ると、これからも交流会を継続してお互いに交流を深めることを望む多くの声とともに、いずれの方も今回設定したコースの意図を的確に汲み取っていただき、横浜や鶴見川流域との違いを感じながら歩いたことが分かる。ここで言うまでもなく、フィールドワークの重要な視点は、普段、自分たちが当たり前と思っていることでも少し見方を変えると異なった姿が現れ、それによってさまざまなことを考えることにあるが、まさにそうした体験をしていただけたのではないかなと思われる。これは横浜からの参加者ばかりに言えることではない。今回のフィールドワークでは豊富な見所の中で、例えば横浜水道道やいくつかの陰陽石などはおそらく横浜の方は驚かれたり喜ばれたりするであろうことはある程度予想していた（コースを計画する際には当然その点を意識した）。ところが、それに加えて、遠来からの参加者が大変喜んだ（と見えた）のは、レポートの中で多くの方が記しているように相模川の流れや河岸段丘の風景であったのである。これは、日常的にこの地域でフィールドワークを行なっている相模原の人間にとってはいつも目にするものであり、ある程度慣れていることもあるためかそれほどの驚きはないのではなから

うか。自分たちが案内をした参加者が、どの場所にどのような反応を示すのかを知ることは、自らが生活する地域について改めて考え、その魅力を再発見する大切な契機となると捉えられるのである。今回の交流会は、本館にとっても今後ともフィールドワークを進めていくに当たって、このような活動を見つめ直す良い機会となるものであった。その意味でも横浜市博「民俗に親しむ会」の皆様に対してお礼を申し上げたいと思う。本当にありがとうございました。

おわりに

現在、各地の博物館では市民協働によるさまざまな活動が行われ、それはもはや当たり前のこととなっており、博物館のこうした活動はすでにやればよいとの段階は当の昔に過ぎ去り、質が問われる状況にあると言えよう。変動が激しい現代社会において、博物館の活動及び運営に市民が参加するのはもとより、協働した成果をいかに全体の財産として蓄積し、新たな価値や魅力を創り出していけるのか、また、資料の収集保管や調査研究、展示・教育普及といった機能を通じてどのような貢献ができ、より良い地域の形成にその担い手の育成とともに寄与できるのかが大きな課題となるところであろう。

そして、博物館が抱える課題の一つに、多様な活動を束として捉えてネットワーク化を図る点がある。この場合のネットワークとはもちろんいろいろな意味があり、例えば、本館中での民俗分野の諸活動の関連はもとより本館の他分野との関係なども挙げられる。本文中で述べた11月の開館記念日の近くに実施している「学びの収穫祭」などはまさにこの点を意図したものである（注7）。博物館のネットワークとしては、例えば神奈川県では県博物館協会の活動が盛んで、研修会をはじめとして情報交換や運営上の共通の課題の検討なども行われているが、それ以外にもさまざまな面における各博物館相互のネットワークという視点も今後、一層重要となると捉えられる。

今回の両館の試みもこうした意図のもとに実施しているものであり、その取り組みはささやかではあるものの継続して行っていきながら成果を蓄積し、また、課題を明らかにしていくことこそが重要である。これからも相模原市立博物館・民俗調査会と横浜市歴史博物館・民俗に親しむ会の交流が深まり、お互いに楽しく良い関係が保たれながら着実な活動が展開されることを望んでいる（注8）。

注

(1) 現在のところ、民俗調査会A（活動日：毎月第二水曜日）及び民俗調査会B（活動日：毎月第四土曜日）のほか、津久井郷土資料室の収蔵資料の整理・目録化を目的とする「水曜会」（活動日：毎月奇数週の水曜日）があり、さらに最近、有形の民俗資料の整理や展示を行う「福の会」（活動日：毎月奇数週の木曜日）が発足して別稿の下溝・福田家の蔵に保管されてきた資料の整理を始めている。

(2) 二つの民俗調査会の結成の経過については、拙稿「歩く・聞く・見る・展示する～秋季企画展「市民と歩いた横浜への道」開催記録と民俗調査会の活動～」『相模原市立博物館研究報告』第19集 2010 で紹介した。

(3) 第一回目は平成24年3月14日（水）に新磯地区、第二回目は11月14日（水）に田名地区で開催した。参加者は第一回目が35名（一般24名＋会員11名）、第二回目30名（一般21名＋会員9名）であった。なお、第一回目の探訪会に際しては、調査会Aの活動として新磯地区の「散策マップ」（北部版・南部版）を作成し、その南部版を使用してフィールドワークを行っている。この「散策マップ」及び関連説明については、博物館のHPで、「どこでも博物館」の「発見のこみち」の中で公開している。

(4) 「民俗の見方、調べ方」講座の内容や、その後の「民俗に親しむ会」のフィールドワークの経過等については、横浜市博の民俗担当学芸員である刈田 均氏が「市民協働による市域の民俗調査」と称して同館の『調査研究報告』第5集（2009）から毎年状況についてその都度報告されており、現在、第8号（2012）まで刊行されている。なお、第8号にはここで記す両館の交流会の開始のいきさつ等についても触れられており、5月に相模原を案内されとの記載がある。

(5) 本稿では当日歩いた主な見学場所のみを紹介し、いくつかの地点の写真を掲載するのに留める。なお、当日の参加者は、相模原側17名（別に学芸員1名）、横浜側8名（別に学芸員2名）であった。

J R 鶴見駅東口（午前9時30分集合）→旧東海道→鶴見神社→鶴見川橋→金剛寺→二ヶ領用水跡→市場一里塚跡→市場熊野神社→京急鶴見市場駅→京急生麦駅→生麦事件旧跡碑→神明社→生麦地区センター（昼食・打ち合わせ）→道念稲荷社→水神社→鶴見川旧河口→魚河岸通り→J R 鶴見線国道駅→海芝浦駅→海芝公園（京浜運河）→J R 鶴見駅（午後4時解散）

(6) このうち平塚市博物館では、平成24年（2012）2月4日から19日を会期として「博物館文化祭」（このタイトルは今回からでこれまでは「博物館まつり」）を同

館の特別展示室において行い、博物館に拠点を置く10の市民サークルが日ごろの活動実績や成果を展示した。そして、12日（日）の午後からは、そのうちの6団体がより具体的に自分たちのサークルの活動について紹介する発表会（別の日に実演を行った会もある）があり、この発表会に本館の民俗調査会Aの会員が出席した。さらに、発表会終了後には、平塚市博物館の各サークルの代表者と民俗調査会との交流会もあり、お互いの活動の状況や課題について若干の質疑応答や話し合いを行った。

本稿で紹介した本館の「学びの収穫祭」への他館からの参加はとりあえず23年度のための単発に終わっており、今後とも機会を捉えて展開していかなければならない課

題と認識している。

(7) このほかに、例えば相模原市では公民館活動が盛んで公民館に拠点を置く各種団体があり、その中では人文・自然を問わずすぐれた活動が行われている。こうした団体とのネットワークの形成ももちろん重要であり、「学びの収穫祭」でもまだまだ数が多いとは言えないもののいくつかの団体に呼びかけて成果の発表をしていただいており、今後ともこうした点に一層取り組んでいく必要がある。

(8) 本稿は、刈田・羽毛田氏と調整しながら加藤が執筆した。なお、横浜市歴史博物館の『調査研究報告』には加藤と調整の上、刈田氏が執筆の予定である。

第1回交流会（相模原市中央区田名）



堀之内の陽石道祖神を見る横浜の会員



相模原の会員が横浜の会員に説明する



「神奈川名勝史跡 45 佳選」碑での説明



最後の記念撮影

第2回交流会（横浜市鶴見区）



解説をする横浜の会員（鶴見神社）



旧東海道の市場一里塚跡



生麦地区が漁村であったことを伝える水神社



所々では横浜市博の学芸員が説明した



レトロ感あふれる国道駅



国道駅壁面には機銃掃射の弾痕が残る



杭のあるあたりが鶴見川旧河口



海芝浦駅の海芝公園から見た東京湾